

## 白居易「夜送孟司功」詩の本文異同について

静永, 健

九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 准教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/13192>

---

出版情報 : 中国文学論集. 37, pp.1-15, 2008-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 白居易「夜送孟司功」詩の本文異同について

静 永 健

一九六〇年代以降、『白氏文集』本文の校勘作業は、平岡武夫博士<sup>1</sup>、そして太田次男博士<sup>2</sup>を中心に、主として我が国の研究者の手によって推し進められてきた<sup>3</sup>。その理由は、何よりも「金沢文庫旧蔵本（金沢本）」<sup>4</sup>など我が国に数多く保存されてきた平安以来の貴重な旧鈔本の「恩恵」に拠るものである。

これら旧鈔本の一部は、今では原寸大モノクロ印刷での出版も試みられているが、朱点や角筆などの特殊な書き入れを幾種類も持つ這般の文献は、これまでの（旧式）撮影技術では到底覆い尽くせるものでは無く、今後は恐らく、せめてデジタル方式によるカラー画像での公開が求められてゆくであろう。もとより、それでもなお実物を熟覧して得られる知見には及ばないが、全国、そして全世界の人々が、我が国平安・鎌倉時代の知識人の筆を通して、中国九世紀に活躍した詩人の作品を、瞬時に、しかも煩瑣な手続き無く閲読できることは、ひとり中国古典文学の研究のみならず、日本中世の伝統文化（なかならず古典学習のあり方）に触れるという意味でも、たいへん幸福なことだと思つ。

ところで、これは『白氏文集』に限ったことではなく、時の古今、そして洋の東西を問わず普遍的に起こり得る問題であるが、文学作品の校勘作業は、ただ単に伝来の最も古い文献を探し当てたことによって完結するものではない。筆写（あるいは出版）年代の古さは、本文批判の際の一応の「基準」とはなるが、一概にそのみによって優劣が決定されるものではなく、後日、他の所蔵者の持つ別のテキストから、全く異なる本文が見い出された時、その是非の判定は更に慎重な考察が求められるのである。

白居易「夜送孟司功」詩の本文異同について

さて、ここに取り上げる白居易の詩には、以上のような「諸本」からの本文異同が重層的に堆積しており、その判断については、従来より議論が重ねられてきたところである。しかし後述するように、近年これについての全く新しい説が中国より提出された。筆者は、その謝思煒氏の見解を知り、最終的にこの説を正しいと支持するものであるが、如何せん、該説の提出者には、いまだこのことについての詳しい考証が発表されていないようである。そこで小稿は、以下、筆者独自の調査結果を述べ、白楽天の一詩句についての、謝氏の説の妥当性を検証しようとするものである。

## 一 これまでの通行諸本の本文

問題となっている作品は、『白氏文集』巻十七に収録されている次の一首である。まずは一般に通行する南宋本（南宋紹興年間刻本<sup>6</sup>）に基づいた本文によって示し、文字異同が存在する箇所から、までの傍線を付す。

夜送孟司功 白居易

潯陽白司馬、夜送孟功曹。江閩管絃思、樓明燈火高。湖波翻似箭、霜草殺如刀。且莫開征棹、陰風正怒號。

（作品番号一〇四四<sup>7</sup>）

の異同については次章に述べる。そこで、<sup>8</sup>の文字異同より考察を開始したいが、第三句「江閩<sup>9</sup>くして管絃思<sup>10</sup>ひあり」には、第五字を「思」とするものと、「急」字に作るものとに分かれる。いま、これを平岡氏の校定結果<sup>9</sup>によって示すと、次のようになる。

「江閩管絃思」……金沢本・南宋本・活字本。

「江閩管絃急」……麗本・那波本・馬本・汪本・全唐詩本<sup>10</sup>。

注意したいのは「南宋本」と「那波本」との関係である。江戸初期に朝鮮版をもとに覆刻刊行された那波本は、『白氏文集』七十一巻の各巻の配列が白居易生前の編集形態を保存する所謂「前集後集本」であることから、一般に現存『白氏文集』単行刊本の中で最も古いものとして珍重される。しかし那波本は、白氏の自注を削除するなど、その一字一字の本文レベルでは、なお完全に信頼できるものではない。その点、南宋本は、「前詩後筆本」に再編集されたものではあるが、時に那波本系統の誤りを受け継いでいない部分があり、右もその好例だと考えられる。そこで、ここでの決め手は金沢本にある。金沢本に書き入れが見られない「急」字は、おそらく後世（南宋以降）の誤写の混入として処理してよいであろう。平岡氏の校定は、この異同について「思」字を正しいとした上で、更に「急」字を「蓋求對偶而改（蓋し對偶を求めて改めたり）」と推測する。なるほど第四句「灯火高し」に対するものと考えると、「管絃急なり」は聴覚的にもイメージし易い表現であり、近年の校点本でも顧学頡『白居易集』（中華書局、一九七九年）は「急」字を是とし、朱金城『白居易集箋校』（前掲注3）に至っては「宋本訛りて思に作る」とまで言い切っている。だが、理解し易い字句は往々にして後世の人士の恣意的な改変の結果である可能性が少なくない。最新刊である謝思煒『白居易詩集校注』が、上記の平岡説に従って「思」字を正しいとするのは、やはり妥当な意見である。夕間せまる船着き場での別れの場面において、聴く者を、ふと「もの思い」に誘うような情景描写は、あながち間違いとは言えない。ちなみに金沢本の写真を熟視すると「思」字の右上隅に「去声」を示す声点（・）が「思」のように付けられている。一般的な「思」字が平声（sī）であるのに対し、深い思索や強い情念を示す場合には去声（sì）となるという中世の特殊な讀書音は、我が国の鎌倉文人たちにも伝えられていたものようである。

さて、次に の異同の検討に移りたい。

本文の第五・六句「湖波翻似箭、霜草殺如刀（湖波翻ること箭の似く、霜草殺ること刀の如し）」は、ただ一つ金沢本を除いて、他の全てのテキストがこのように作っている。しかし平岡氏の校定に拠れば、金沢本は第五句第一字を「潮」に、そして両句の第二字と第三字とがとも互倒して、

「潮翻波似箭、霜殺草如刀」潮の波をひるが翻すこと箭の似く、霜の草をころ殺すこと刀の如し。

となるという<sup>(15)</sup>。しかしながら、この本文は那波本・南宋本など現存する他の版本に受け継がれることは無かった。五言句の二字目と三字目の間に文節を置かず故意に不自然なリズムを取るのは、白居易詩に習見せられる特徴であり、そのように捉えれば金沢本文を白詩のオリジナルと考えることに躊躇が無くなるが、ここは敢えて自制し、この異文を「一つの可能性ある本文」として付記するに留めるのが穩当であろう。金沢本をはじめとする旧鈔本文が、まさしく作者の原作であろうと認められるには、一種類だけでなく、複数の、しかも系統を異にするテキスト(例えば『文苑英華』など)から、その妥当性が判明する場合か、もしくは典故や用例などによって、確実にその本文の正しさが立証される場合のみに限られるべきだと筆者は考えるのである。

## 二 白司馬・魯司馬・魚司馬

いよいよ冒頭の 本文異同について検討する時が来た。

詩歌の冒頭「溇陽白司馬、夜送孟功曹」については、唯一、金沢本にのみ以下のような書き入れが見える。

「溇陽白魚イ司馬・夜送孟摺本功曹」

第一句は、通行本(および金沢本の原本)では「溇陽の白司馬」、つまり江州司馬左遷中の白居易その人を直接指しているのだが、「魚司馬」とした場合、歴史上の人物に仮託された典故表現になる。また第二句の通行本(および金沢本の校勘した「摺本<sup>(16)</sup>」)の「孟功曹」は、いま白居易が対面している司功參軍の孟某(名不詳)を指すが、一方、金沢本の原本「范功曹」を探ると、これも典故表現(後述の通り後漢の范滂)となるのである。思うにこれは、「目前の人物」(白司馬・孟功曹)か、「典故になぞらえた表現」(魚司馬・范功曹)であるかの二者択一の問題

として併せて考えるとよいであろう。

では、いずれが白楽天の原作に近いのであろうか。

この問題に対し、筆者は、既に平岡氏の考証<sup>17)</sup>が示す通り、後者の典故表現を是とする見解に与するものである。とりわけ第二句に限定して考える時、単に目前の孟某を指した場合と、その人物を後漢の俊英范滂になぞらえた場合とは、詩全体の内容の深まりに歴然たる差異が見えるからである。

『後漢書』党錮伝に列せられる范滂は、字は孟博、汝南征羌（いまの河南省郟城市の東南）の人。若きより清廉潔白で、しかも熱烈な正義漢として名を知られ、冀州（河北省）が饑饉で群盗が蜂起するや、清詔使に任命されて同地を巡察。彼が州境に至ったというだけで、汚職の摘発を恐れた州の太守は、その印綬を解いて逃亡したという。また、党錮伝の序伝部分にも范滂の青年時代のエピソードが紹介されているが、汝南太守の宗資が、その政務の一切を部下（すなわち功曹参軍）の范滂に委ねていたことから、郡民がこれを揶揄して「汝南の太守は范孟博、南陽の宗資は画諾（承諾書の署名）を主るのみ」との謡言が広まったという<sup>18)</sup>。悲しい哉、范滂は、やがて後漢末期の「党錮の禁」の標的となり、二度の下獄のち三十三歳の若さで命を落とすことになるのだが、かかる人物に眼前の孟某をなぞらえた白楽天の意図は、その官職の一致（功曹参軍は司功参軍の旧名）とともに、孟某が范功曹と同じく有能かつ高潔の士であること、また恐らくは、かつて白楽天が長安で目を掛けていた青年であったが、今回の司功参軍赴任は江州よりも更に僻遠の地であって、その才能に見合わぬ不意な処遇であることを暗に示したものであろう。また、これも推測の域を出ないが、本詩の結句「陰風は正に怒号せり」という不吉な終わり方を見ると、孟某の任地は、いま政情不安が報じられている紛争地域であるかとも想像される。このことも、先に述べた范滂伝の故事（冀州巡察）に符合するであろう。以上を勘案すると、本詩第二句の原文は、やはり「范功曹」である方が相応しく、それに対する第一句も恐らくは「白司馬」ではない可能性が強くなるのである。

さて、次に問題となるのは金沢本の異文「魚司馬」とは誰を指すのかということである。

平岡氏の判断では、それは更に「魯司馬」の転訛であるという（前掲注17）。その理由は、同じく『白氏文集』卷十七の次の詩（作品番号一〇一〇）の、これまた同じく金沢本に施された書き入れに基づくものである。

白居易「夜送孟司功」詩の本文異同について

溥陽歳晩、寄元八郎中・庾三十三員外 溥陽の歳晩、元八郎中・庾三十三員外に寄す 白居易

閔水年将暮 燒金道未成 水を閔めつつ 年は將に暮れんとし、金を焼くも 道は未だ成らず。

丹砂不肯死 白髮事須生 丹砂 肯て死せざるも、白髮は 事須く生ずべし。

病肺慚杯滿 衰顔忌鏡明 肺を病みて 杯の満つるを 慚とするも、衰顔なれば 鏡の明なるを忌む。

春深舊鄉夢 歳晚故交情 春深くして 旧郷をば夢み、歳晚れなば 故交への情つこのれり。

一別浮雲散 雙瞻列宿榮 一別 浮雲のごとく散じ、双瞻すれば 列宿のごとく榮ゆるならん。

螭頭階下立 龍尾道前行 螭頭の階下に立ち、龍尾の道前に行む。

封事頻聞奏 除書數見名 封事 頻りに聞奏し、除書に 數しば名を見す。

虚懷事僚友 平步取公卿 虚懷 僚友に事はり、平步 公卿に取ふ。

漏盡雞人報 朝迴幼女迎 漏尽き 雞人の報するあさ、朝より廻りて 幼女迎ふ。

可憐白司馬 老大在湓城 可憐むべし 白司馬は、ひとり老大のまま 湓城に在り。

この詩も白居易江州司馬左遷中の作品である。みやこ長安で立派に中央官を務める友人元宗簡と庾敬休とに送られたものであるが、平岡氏が注目したのは、傍線を付した最終聯「白司馬」の部分である。金沢本は、

「可憐白司馬」  
句或本

とするが、さらにこの「白」字の真下（アミカケ部分）には、当初別の字が書かれていて、それを胡粉によつて塗抹した形跡がある。この塗抹字については、透視によつて「魯」字であることが判明しているが、平岡氏はこれを正文として認め、更に「魯司馬」とは三国魏において司馬の職にあつた魯芝（伝は『晋書』良吏伝に見ゆ）であるうかと推測するのである。しかし、魯芝のそれは、魏王朝の中央官たる「司馬」であつて、特別な理由もなく唐代江南の一地方官を指すには、あまりにも懸け離れているように思われる。ここは更にもう一步踏み込んだ考察が必

要なのである。

そこで、この平岡氏の説（魯司馬説）を再検討し、第三の説（魚司馬説）を提出したのが、冒頭にも述べた謝思煒氏の『白居易詩集校注』である。

謝氏によれば、「魚司馬」とは次に挙げる梁の何遜の五言詩に登場する人物を指すという。

日夕望江、贈魚司馬

日夕 江を望み、魚司馬に贈る

何遜（四六七？～五一八？）

溢城帶溢水 溢水縈如帶

溢城は 溢水を帯び、溢水は 縈りて帯の如し。（上帶字、當作對。注27詳述。）

日夕望高城 眇眇青雲外

日夕 高城を望めば、眇眇たり 青雲の外。（高城、一作高樓。眇眇、一作耿耿。）

城中多宴賞 絲竹常繁會

城中 宴賞 多く、絲竹 常に繁會す。

管聲已流悅 絃聲復悽切

管の聲は 已に流悅し、絃の聲は 復た悽切。

歌黛慘如愁 舞腰疑欲絕

歌の黛 慘として愁ふるが如く、舞の腰 疑（＝凝）りて絶えんと欲す。

仲秋黃葉下 長風正騷屑

仲秋 黃葉下り、長風 正に騷屑。

早雁出雲歸 故燕辭檐別

早雁 雲より出でて歸れば、故燕 檐を辭して別る。

晝悲在異縣 夜夢還洛汭

晝は異県に在るを悲しみ、夜は洛汭に還るを夢む。

洛汭何悠悠 起望登西樓

洛汭 何ぞ悠悠たる、起望 西樓に登る。

的的帆向浦 團團日隱洲

的的として 帆は浦に向かひ、团团として 日は洲に隠れんとす。（日隱洲、一作月映洲）

誰能一羽化 輕舉逐飛浮

誰か能く一たび羽化して、輕舉して（夕陽を）逐ひて飛浮せん。

（『玉台新詠』卷五）

この詩は冒頭「溢城」の二字からも明らかのように、いま白居易がいる江州（江西省九江市）を舞台としている。しかも「管絃」のうたげに興じ、異郷の卑官にある悲しみを訴える部分も、上述の「夜送孟司功」詩、更には江州司馬左遷中の彼の一連の作品のほとんどに、見事に重なり合うように思われる。白居易は、江州司馬の職にある自己をこの六朝期の作品になぞらえて、「潯陽魚司馬」（「夜送孟司功」詩第一句）、そして「可憐魚司馬、老大在溢城」

白居易「夜送孟司功」詩の本文異同について



〔溇陽歲晚〕詩の最終聯〕と書いていたと推測されるのである。

そこで本章の小結として、白居易「夜送孟司功」詩を、筆者が正しいと思う本文に修正して解釈を示しておく。

夜送孟司功

夜に孟司功を送る

白居易

溇陽魚司馬 夜送范功曹

溇陽の魚司馬、夜 范功曹を送る。

江閭管絃思 樓明燈火高

江閭くして 管絃思ひあり、樓明にして 灯火高し。

湖波翻似箭 霜草殺如刀

湖波 翻ること箭の似く、霜草 殺ること刀の如し。

且莫開征櫂 陰風正怒號

且征棹を開く莫れ、陰風 正に怒号せり。

—— かつて梁の何遜にうたわれた魚司馬のように、私はいま、この寂しい溇陽のまちで卑官に甘んじている。

しかし今宵は、後漢の范功曹のとき有能な君を、この埠頭に見送ることができた。江水のしじまに、管絃のゆるやかな調べが響きわたり、埠頭のががり火が、夜空に高々と樓閣を浮かび上がらせている。南湖より長江にそそぐ水路の水は、我々をせき立てて矢のように速く流れ、晩秋の霜の気は、まるで刀剣で薙ぎ倒したかのように、地面の草花を凋ませてしまった。おい、そんなに出航を急がれるな。陰惨な烈風が、いま君の行く手には怒号のごとく唸り声を上げていているではないか。

### 三 典故表現としての江州司馬

ここで改めて白居易と何遜詩との関係確かめてみたい。白樂天は果たして本当に何遜のこの詩を読み、みずから「魚司馬」になぞらえよとする意識があったのだろうか。

しかしこの答えは、実に意外なところから導き出すことが出来そうである。すなわち『白氏文集』卷十六の冒頭「東南行一百韻」と題する長篇詩の中に、まさしく彼は、この詩を引用して江州のまちを説明しているのである。

林對東西寺 山分大小姑 林は 東西の寺に対し、山は大小の姑を分かつ。

〔白氏自注〕東林・西林寺在廬山北、大姑・小姑在廬山南、彭蠡湖中。

\* 東林・西林寺は廬山の北に在り、大姑・小姑は廬山の南、彭蠡湖の中に在り。

廬峯蓮刻削 溢浦帶縈紆 廬峯は 蓮のごとく刻削し、溢浦は帯のごとく縈紆す。

〔白氏自注〕蓮花峯在廬山北、溢水在江城南。何遜詩云、溢城對溢水、溢水縈如帶。

\* 蓮花峯は廬山の北に在り、溢水は江城の南に在り。何遜詩に云ふ「溢城は對溢水に對し、溢水は縈ること帯の如し」と。

(作品番号〇九〇八詩、その第一三七〜一四〇句。傍線は筆者)

この詩は、「夜送孟司功」詩と同じく、元和十二年(八一七)の作とされる。しかも、その第一三六句に「淮寇は尚ほ誅を稽む」とあつて、吳元濟の乱(前掲注19)鎮圧以前のものと思しい。何遜のこの詩は、江州を詠じた名作の一つとして、確かに白居易に認識されていたようである。

しかも白楽天とこの何遜詩との関係は、そのみに留まるものでは無かつた。

舞急紅腰凝去聲

歌遲翠黛低

舞は急にして

紅腰凝たぢりまり、

歌は遅ゆるやかにして

翠黛低ひそめたり

(白氏文集、卷六十六、作品番号三三二二詩。その第二二〜二二句)

これは開成二年(八三七)の作、これまでの作品に比べ、かなり後年の詩ではあるが、何遜詩の第九〜十句「歌黛慘如愁、舞腰疑欲絶」を踏まえた表現であると思われる。なお、筆者はこの白詩句に見える自注「凝去聲」を根拠として、先に示した何遜詩「疑欲絶」の「疑」字を「凝」とまる、急停止する(の意味で訓んだ。さて、このように見てくると、自然に思い起こされるのが、「琵琶引(琵琶行)」の次の名場面である。

間關鶯語花底滑

幽咽泉流水下難

間関たる鶯語

花底に滑なめらかに、

幽咽せる泉流

氷下に難なやめり。

水泉冷澀絃凝絶

凝絶不通聲暫歇

水泉

冷澀して絃凝絶し、

凝絶して通ぜず

声暫く歇む。

(白氏文集、卷十二、作品番号〇六〇三詩。その第二七〜三〇句。傍点は筆者、以下同)

白居易「夜送孟司功」詩の本文異同について

この一節は、言うまでもなく琵琶の演奏の場面を描いたものであるが、楽曲の一时的な中断を意味する「凝絶」の語は、恐らくは何遜詩の「疑（凝）欲絶」を二字に省略して作られた表現として考えてよいように思われる。

それにしても、何遜「日夕望江」詩の詠じた情景——江州のまち（湓浦の川辺）、夕暮れ時、二人の登場人物（何遜・魚司馬）、管絃と妓女の舞姿、みやこ（洛陽）への思い——は、既に述べた通り「夜送孟司功」詩に共通する部分が多いが、更になお重なり合つて見えるのは、かくいう白楽天の江州での絶唱「琵琶引」である。

筆者は、かねてより「琵琶引」の本文、そしてその前置きとしての効果をもつ序文において、その登場人物たちの「不透明」な描き方に興味を覚えていた。<sup>(29)</sup> 作者本人と思しき彼は、序文において「予」、また本文では「主人」とのみ称し、彼が見送ろうとしている旅人（客）とのみ称す）や、更には琵琶の名演奏を披露したかの女性に至つては、その名が決して明かされることがないのである。ある意味では、こんにちもなお「琵琶引」が名作として鑑賞される所以の一つが、その登場人物の不透明な呼称にあるかもしれないのだが、一方、主人公（すなわち「予」）の官職名が、その名前の扱い方とは逆に、きわめて具体的に記されることに、筆者は少なからず不均衡な違和感を感じていた。

凄凄不似向前聲 滿座重聞皆掩泣 凄凄 向前の声に似ず、滿座 重ねて聞きて皆 泣を掩ふ。  
就中泣下誰最多 江州司馬青衫濕 就中 泣下ること 誰ぞ最も多き、江州司馬 青衫 濕ふ。

（その第八五、最終句）

だが、この「江州司馬」の明示を、何遜詩に登場する「魚司馬」に基づく典故表現とするならば、その不均衡感も幾分かは緩和されるように思われる。そして、そのように考えてゆくと、この「琵琶引」に語られた物語も、六朝何遜詩をモチーフとした「創作」であると解釈することも十分可能になってくる。「琵琶引」は果たして実話なのか、はたまた創作性の強い虚構なのか（いかにも作り話であることを読者に明示した上で語られているのか）については、<sup>(30)</sup> また稿を改めて、筆者の見解を述べたいと思う。

注

- (1) 平岡武夫・今井清「校定」『白氏文集』全三冊（京都大学人文科学研究所、一九七二～七三年）。
- (2) 太田次男・小林芳規「共著」『神田本白氏文集の研究』（勉誠社、一九八二年）、太田次男「旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究」全三冊（勉誠社、一九九七年）、同氏著『空海及び白楽天の著作に係わる注釈書類の調査研究』全三冊（勉誠出版、二〇〇七年）。
- (3) もちろん、海外の研究者にも参照すべき業績はある。羅聯添『白居易散文校記』（台湾・学海出版社、一九八六年）、朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年）など。
- (4) 現在所在の確認できるものとして、次の三箇所のものがある。大東急記念文庫所蔵……影印は『金沢文庫本白氏文集』全四冊（勉誠社、一九八三～八四年）。天理図書館所蔵……影印は『天理図書館善本叢書・漢籍之部第二巻・文選 趙志集 白氏文集』（八木書店、一九八〇年）。国立歴史民俗博物館所蔵……影印は『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書・文学篇第二十一巻・漢詩文』（臨川書店、二〇〇一年）。
- (5) 謝思煒『白居易詩集校注』（北京・中華書局、二〇〇六年）。なお静永の書評「謝思煒『白居易詩集校注』の刊行を賀す」（『白居易研究年報』第八号、二〇〇七年）の第二章をも参照されたい。華訳は陳獅「謝思煒『白居易詩集校注』述評」（『中唐文学会報』第十四号、二〇〇七年）がある。
- (6) 中国国家図書館所蔵。影印は『白氏長慶集』（北京・文学古籍刊行社、一九五五年。のち台湾・藝文印書館、一九八一年再刊）。また中華再造善本「唐宋編・集部」『白氏文集』（北京図書館出版社、二〇〇三年）。なお、上記のうち九州大学図書館が所蔵する一九五五年文学古籍刊行社影印線装本は、同年訪日した郭沫若氏がかつての母校九州大学に寄贈したものであることを、九州大学大学院岸田憲也君の調査によって知った。
- (7) 白居易の作品番号および製作年代の考証は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店一九六〇年初版、のち朋友書店一九七四年再版）に収める「綜合作品表」による。
- (8) なお、他にも「闇」字を「暗」字に、また「絃」字を「弦」字に作るなどの瑣細な異同が存在するが、いずれも意味上の区別を伴わないもの（異体字）と判断し、ここでは不問に付した。以下、他の詩句も同様。

白居易「夜送孟司功」詩の本文異同について

- (9) 前掲注(1)『白氏文集』その第一冊、三〇九頁。
- (10) 活字本とは宮内庁書陵部所蔵朝鮮銅活字本(一四八五年刊)。麗本とは天理図書館所蔵朝鮮整版本。那波本は江戸の那波道円一六一八年刊本(平岡武夫『白氏文集歌詩索引』に影印所収、同朋舎、一九八九年)。馬本は明代の馬元調一六〇六年刊本。汪本は清代の汪立名一七〇三年刊本。全唐詩本は清代の曹寅奉勅撰一七〇七年刊本。
- (11) 神鷹徳治『悲劇の善本朝鮮銅活字本』『白氏文集』——那波本の生誕を繞って——(勉誠出版『アジア遊学』第十二号、二〇〇〇年一月)参照。
- (12) 『広韻』去声七志韻。相吏切、念也。謝思煒『白居易詩集校注』も、「思、愁思」と解釈した上で、『毛詩序』の「亡国の音は哀にして以て思ふ」を挙げ、その『經典釈文』の「思、息吏反」という反切を引用する(吏字は去声)。しかし、そもそもこの金沢本第十七巻には随処に声点が見られ、特に作品番号一〇五五詩の第五句「試將詩思相招去」には同じく「思」との声点が見える。この詩の場合、平仄の關係からも「思」字は去声でなければならぬ(ただし金沢本以外の諸本は「詩句」に作る)。平安文人たちが『白氏文集』などの漢籍を読む際、「訓読」とともに必ずや「音読」も重視していたであろうことは、静永『平安文人たちと『白氏文集』』(勉誠出版『アジア遊学』第九三号、二〇〇六年十一月)に述べた。
- (13) 前掲注(4) 勉誠社『金沢文庫本白氏文集』の図版を参照していただきたいが(第二冊、二二一頁)、実際の原本は、かなり複雑な抄録形態になっている。いま要点のみを図示すれば、

「潮<sup>潮</sup>翻<sup>波</sup> 似<sup>波</sup>箭・霜<sup>波</sup> 煞<sup>七</sup>草<sup>本</sup>如<sup>七</sup>刀<sup>本</sup>」

のように、「波」字は後から書き入れられたものであり、さらに「煞(殺)」字の上にも、書き入れを指示しようとしたかの如き「」印が付けられている(声点ではない)。この一句については、金沢本の原本にも混乱が見られる。

(14) 我が国に数種所蔵される那波本『白氏文集』の当該詩句の欄外には、この異文についての書き込みが見える。すなわち、東京国立博物館所蔵本(林羅山書き入れ本)、名古屋市蓬左文庫所蔵本(伝細井平洲旧蔵本)、慶應義塾大学図書館所蔵本(新見正路書き入れ本)の三種である。このうち羅山本のみ「潮翻波似箭、霜殺草如刀」とするが、蓬左

本・新見本は「湖翻波似箭、霜殺草如刀」とする。「潮」字を意図的に退けたか。別の白詩（巻十六、〇九四八詩）に「近來潮不到濫城（近ごろ潮は濫城に到らず）」とあるように、「潮」字には疑念が残る。

- (15) 一般に五言句は「上二文字・下三文字」で区切れるが、白詩には往々にして、このリズムを故意に変化させる場合がある。松浦友久「白居易のリズム——詩型とその個性——」（『白居易研究講座』第一巻所収、勉誠社、一九九三年。のち『松浦友久著作選』に収録、研文出版、二〇〇四年）参照。

- (16) 金沢本『白氏文集』第十七巻の奥書に拠れば、本巻は日本のA寛喜三年（一一三二）三月十三日に唯寂房（あるいは寂有）によって筆写され、同日に豊原奉重が校閲。のちB嘉禎二年（一一三六）三月十四日に「唐本」によって二度目の校勘が行われ、またC建長四年（一一五二）正月五日に「伝え下せる貴所の御本」によって三度目の校勘と移点が行われたという。ここでの「摺本」とは、恐らくB嘉禎二年の「唐本」（宋代の印刷本）の文字を指すと思われる。とすれば、「魚イ」の注記はこの「伝下貴所の御本」からのものである可能性が高い。この本の来歴等は未詳であるが、建長四年と言えば、後嵯峨天皇の皇子宗尊親王が征夷大將軍として鎌倉に下った年である。親王東下に関連して、皇室秘蔵の「御本」（恐らく唐鈔本に基づく平安旧鈔本）の借覧が鎌倉御家人（豊原奉重ら）に許されたものであるかもしれない。

- (17) 前掲注（一）『白氏文集』その第一冊巻頭に掲載する平岡武夫「白氏文集の校定 序説」その三十五〜三十六頁に詳しく述べられている。

- (18) ちなみに、この功曹時代の范滂の事績と謠言は、白居易が編纂したとされる『白氏六帖事類集』巻二十一の第七十三「功曹」の部にも「主諾」として採録されている。

- (19) この詩は、花房英樹氏（前掲注7）等によって元和十二年（八一七）に繫年される。白居易四十六歳。また第六句「霜草殺如刀」の表現より、恐らくその年の晩秋から初冬の作と推定される。時に淮西節度使吳元済の反乱が終結（同年十月吳元済捕縛、翌月長安で斬首）。孟某の赴任は、恐らくそれに連動する人事であったかと思われる。ちなみに淮西節度使の拠点は当時の蔡州。いまの河南省汝南市から鄭城市の一带であって、奇しくも范滂の故郷にあたる。

- (20) 前掲注（4） 勉誠社『金沢文庫本白氏文集』第二冊、その六頁の図版。

白居易「夜送孟司功」詩の本文異同について

- (21) 前掲注(17)に同じ。なお、この塗抹字について、紙背より光を当ててまず最初に透視を試みたのは、太田次男博士である。太田氏の講演録「古写本を覗く」(前掲注2の太田氏の二単著とともに収録)、および白居易研究会の座談会「太田次男先生を囲んで——白居易研究の過去、現在、そして未来へ——」(『白居易研究年報』第八号、二〇〇七年)参照。
- (22) 『晋書』卷九十、良吏伝に拠れば、魏朝後期、中央政権の実力者であった曹爽(曹の太祖の一族)が魯芝を「司馬」に昇進させたという。しかし曹爽はのち司馬懿(晋の宣帝)によつて謀叛の罪を着せられる。このとき魯芝は、曹爽に忠告し、投降して命を全うすることを勧めたが、狼狽した曹爽は彼の言を聞き入れなかつたという。やがて曹爽が誅殺された後、魯芝は一時投獄されるが、司馬懿にその才能を認められてその幕下に入り、やがて晋朝に至つても活躍し、光祿大夫を以て致仕する。
- (23) 前掲注(5)謝氏校注の第三冊、一三二頁。また、その考証は同書第一冊の「前言」第十三頁にも述べられているが、この説の提案者は中華書局総編輯の傅璇琮氏であるという。更に詳しく謝思煒氏に事情を伺つたところ、校注の校正時に、傅氏が謝氏に直接に指示したとの由である。
- (24) 清・吳兆宜の『玉台新詠箋註』等に拠れば、この魚司馬とは、『南史』卷五十五および『梁書』卷二十八に伝が見える魚弘だという。しかし、鈴木虎雄『玉台新詠集』(岩波文庫、一九五五年。その中冊一九九頁)が既に疑問を呈しているように、史書に見える魚弘の司馬職就任(太清元年「五四七」以降)の頃、既に何遜は在世しない。この詩に見える魚司馬と梁の「驍將」であつたと謂われる魚弘とは別人の可能性がある。史書の伝える魚弘は、身長八尺、白皙の美男子だつたそうだが、その生きざまは享樂的で、やや放埒にも過ぎるようだ。南譙・盱眙・竟陵の三太守を歴任したが、かつて彼みずからが人に語つたところでは「自分が郡守となると『四尽』が起る。水中には魚鼈が尽き、山中では麋鹿が尽き、田中に米穀が尽き、村里では人庶が尽きる、云々」と。恐らく白居易において、この正史所伝の魚弘の人と為りは、全く念頭に無かつたと考えられる。
- (25) 何遜のこの詩は、『玉台新詠』のほか、『藝文類聚』卷三十一、『文苑英華』卷二四七、そして明代に編集された『何水部集』二卷の卷一に収録。また単行の排印本として北京・中華書局編集『何遜集』(一九八〇年)がある。



- (26) 何遜のこの詩は、唐代においても確かに人々の記憶に残っていた。白居易たちの前輩である「大曆十才子」のひとり韓翃の作品中に「湓城詩贈魚司馬、汝水人逢王右軍（湓城の詩は魚司馬に贈られ、汝水の人は王右軍に逢ふ）」、「送王侍御赴江西兼寄李袁州」詩、『全唐詩』巻二四三所収」という詩句が見える。
- (27) 何遜の当該詩の第一句は、諸本いずれも前章に挙げた通り「湓城帶湓水」に作る。しかしこの「帶」字は第二句の「湓水縈如帶」との対応が不揃いで、少なからず難をおぼえる表現である。ところで、この白居易の自注に引用するところでは「湓城對湓水」とあり、その問題が解消される。あるいは、この「對」字が元来の何遜詩の本文ではなかったらどうか。
- (28) 『広韻』去声四十七證韻。牛餠切。
- (29) 静永「音楽の『見える』詩歌——白楽天『琵琶行』——」（九州大学中国文学会編『わかりやすくおもしろい中国文学講義』、中国書店、二〇〇二年）参照。
- (30) 『琵琶引』の虚構性について、まずそのことを明確に論じたものとして、太田次男『諷諭詩人』白楽天（集英社、中国の詩人、一九八三年）その一九七、二〇二頁を参照。

白居易「夜送孟司功」詩の本文異同について